特集 3　❑コロナ禍での学生ケア

コロナ禍での学生ケアなどについて

歯学部学生支援担当　口腔生理学分野　山　村　健　介

一昨年12月に中国で報告され、翌年１月に日本で初の感染者が報告された新型コロナウイルスは世界的な大流行を引き起こし、私たちの生活を一変させました。新潟大学でも３月に予定されていた対面での卒業式や祝賀会、４月の入学式や歯学部主催の新入生研修が中止となりました。授業歴の変更や対面形式の授業の中止も４月になってから決定され、私たち教員も非対面形式の授業準備に右往左往することとなりました。その後マスコミでもコロナ禍の中で苦境に陥る大学生の話題が頻繁に取り上げられ、ご子息の状況を案じておられた保護者の方々も多かったと思います。

あれから一年あまりが過ぎ、いまだ感染の収束には至っていない状況ですが、新しい生活様式も浸透し、全く先の見えない状況だった一年前と比べればポストコロナのイメージもわきやすくなった今、歯学部で学生支援を担当している教員の一人としてこの一年を振り返ってみたいと思います。歯学部ニュース編集委員会からは「学生ケア」と題しての執筆を依頼されたのですが、歯学部ではコロナに関連した学生ケアが必要とされた事例がほとんど生じなかったため、それ以外の内容についても私が経験したことを記したいと思います。

１．学生支援・学生ケア

非常事態と言える一年を過ごした今、まず思うのは歯学部の学生さんと保護者の方々、そして授業を担当された先生方の素晴らしさです。その結果、コロナ関連で私が学生さんのケアに追われるようなことはありませんでした。

そのようなありがたい状況となった最大の要因が学生さんです。三密になるようなイベントへの参加、県外への旅行や帰省に伴う他人との交流、仲間内での食事や飲み会などで感染し、時にはそのような学生がクラスターの発端となる事例が全国的には報告されていますが、現時点では歯学部での感染は学生、教職員含めてゼロです。全学（新潟大学）や歯学部の学務係を介して様々な注意事項の伝達がなされ、生活の制限も課せられましたが、それに対応して歯学部の学生さんが節度ある生活を送ってくれたことが大きかったと思います。アルバイト収入の減少や他者との交流機会の減少に伴う孤独感、経験のない非対面型の授業に対する対応など、この一年ストレスを全く感じることなく過ごすことができた学生さんはいなかったと思うのですが、そのことが原因で退学あるいは休学した学生さんは一人もいませんでした。学内に出入りできるようになったあとに、私のところに悩み相談に来た学生さんが数名いましたが、それぞれに悩みを抱えながらも、「皆同じ状況だから今は耐えなくてはならない」と前向きに現状をとらえ、ごく一般的なアドバイスを送っただけで、現在も無事に学生生活を送っています。学生さんそれぞれの自律性、私の知らないところで学生さんを支えてくださった保護者の皆様、そして学生さんの相談に対応し、アドバイスを送ってくださった私以外の教職員に感謝しています。そして忘れてはならないのが、学生さん相互の支え合いです。私が常々感じていることですが、学生さんの悩みの解決にもっとも寄与するのは、普段の学生生活を共にしている同級生や先輩からのアドバイスや様々な援助です。これはコロナ禍でも同じであったように思います。学生支援担当の教員が介入せずとも、学生さん同士で様々な悩みが解決されていたことを学生さんから聞い

ていますし、私自身も実感しています。そのような人間関係が歯学部の学生さんの中で構築されていることは私にとってはとてもありがたいことですし、学生さんは誇りに思ってよいと思います。

このような歯学部の学生さんの人間関係を構築する上で私自身が重要だと思っているのが、中止を余儀なくされた歯学部主催の新入生研修です。この研修会は新入生全員と学部長をはじめとする歯学部執行部の教員、学務委員会や学生支援委員会に属する教員、その年の新任教員など多くの教職員が一堂に会し、歯学部のオリエンテーションやグループに分かれた共同作業が行われます。終了後には先輩学生によるクラブ活動紹介も行われます。この会が終わると新入生同士、新入生と先輩学生、新入生と教員の距離が一気に縮まります。この会を経ることなくコロナ禍で半年の学生生活を過ごした新入生が非常に心配でしたが、ようやく昨年９月30日に歯学部１年生を対象にした対面でのオリエンテーションが開催され、ほぼ全ての新入生と顔を合わすことができました。オリエンテーションに先立って行われたアンケートによると「同級生の顔と名前を半分も知らない」「先輩から話を聞く機会が欲しい」のようなクラス内、あるいは先輩学生との人間関係の構築に関する悩みが大多数を占めていました。オリエンテーションでは、企画の中心となった小野学務委員長による「写真で見る歯学部の専門教育」、臨床実習を総括する藤井教授による「患者さんから学ぶ臨床実習」、学生支援担当として私から「クラスの仲間をもっと知ろう」と題した説明を行った後、先輩学生によるクラブ紹介と学務係による履修相談が行われました。解散の際に「同級生や先生方の顔を見ることができて嬉しかった」と言ってくれた学生さんがいたことがとても嬉しかったことが思い出されます。彼らは現在２年生となり、私が担当する授業を元気に（？）受講しており、ホッとしています。

２．学生教育

このテーマについては他の先生が詳説されると思いますので、簡単に述べるだけにしたいと思います。私が思うのは、新潟大学歯学部は全国の歯科大学の中でコロナ禍による学生教育へのダメージを最小限にとどめた大学の一つであろう、ということです。臨床実習を総括される藤井教授をはじめとする臨床実習に関わる教員、全ての授業に関わる教員の努力と創意工夫の賜だと思いますが、それを可能にしたのは非常事態を感染者ゼロで乗り切った個々の学生さんの自律性であることは強調しておきたいと思います。そのおかげで完全非対面教育が続く学部もある中、歯学部では「必要に応じての対面授業」をいち早く再開することができました。そのため「非対面授業を原因とする学習の遅れ」についての悩み相談を私が受けることはありませんでした。

教育を提供する側として私自身は、非対面授業のうち「資料配付・課題提出型」「Zoomを使ったリアルタイムオンライン型」「動画配信によるオンデマンド型」を経験し、現在は対面型の授業も再開しています。それぞれにメリットとデメリットがあり、学生さんによって好む（あるいは教育効果が高い？）授業形式が異なることが理解できました。現時点では、教員や他の学生と生で意見を交わすことができる対面授業と工夫を凝らした非対面授業をうまく併用することが教育の質を高めるのではないかというイメージをもっています。授業のあり方を再検討する機会を与えてくれたという点において、コロナ禍は私にとって良い学びの機会を与えてくれた気がします。

３．学生の課外活動

令和２年度に行われるはずだった第52回全日本歯科学生総合体育大会は新潟大学歯学部が事務主管でした。この大会は運動部に所属する学生さんにとって、日頃の練習の成果を発揮する場であると同時に、他大学歯学部の学生さんと交流し親交を深める貴重な機会です。私自身も運営に携わった関係で、新潟大学歯学部の多くの学生さん（特に現５年生、６年生）が忙しい中、大会準備に多くの時間と労力を割いてきたことを知っています。コロナ禍による大会中止は不可避ではありましたが、学生さんの無念を思うとやりきれない気持ちですし、中止の決断に快く同意して、事後処理に奔走してくれた学生さんに感謝しています。

現在もクラブ活動は厳しい制限の中行われていますが、一日も早く、コロナ禍が収束し、通常の活動が再開されることを願っています。

以上まとまりのない文章となりましたが、歯学部ニュースを読んでくださる方向けに、この一年の私の経験を報告いたします。

歯学科臨床実習の対応

歯科臨床教育学分野／歯科総合診療科　藤　井　規　孝

歯学科では５年次10月から６年次10月までの１年間、医歯学総合病院歯科外来において学生が担当医の一人として患者さんの治療を担当し、診療に参加する臨床実習を行っています。このため、令和２年度は少なからず新型コロナウィルス感染症拡大対策の影響を受けました。ご存じの通り、この新興感染症については未だに深刻で予断を許さない状況が続いていますが、現在、新潟大学医歯学総合病院歯科・歯学部では患者さんはもちろん、歯科に関係する病院スタッフや臨床実習に参加する学生の安全に最大限の注意を払って診療・実習を継続しています。歯学科の臨床実習については、本誌にこれまでに何度かご報告申し上げてきましたが、まずは改めて歯学科臨床実習の概要を説明いたします。

歯学科臨床実習について

新潟大学歯学部歯学科のディプロマポリシー（卒業認定・学士授与の方針）の人材育成目標には、「変化の激しい現代社会のなかで患者の多様な価値観を受け入れ、質の高い医療を提供するために新たな諸課題に関係者と適切に連携しながら問題解決を図って行く能力を備え、全人的医療を実践できる高い歯科臨床能力を有する人材を育成する」ことが掲げられています。また、プログラムの到達目標（目標とする学修成果）として、①知識・理解（歯科医学に留まらずグローバル世界における経済・社会・生物学的な相互関係、自然や人間社会・文化などを含む）、②当該分野固有の能力（歯科医療に必要な基本的な能力）、③汎用的能力（情報収集、問題解決立案に関する能力、周囲と協力する能力）、④態度・姿勢（倫理・道徳・科学的な意思決定、個性の尊重、公益優先）が提示されており、②には歯科医療において適切な感染予防対策を行うこと、歯科医療において安全を確保することが含まれています。歯学科の最終学年に行われる臨床実習は、これらを診療の現場で確認することを目的のひとつとしています。臨床実習を行う学生は、指導教員の下、医歯学総合病院歯科に勤務する歯科医師が行う業務とほぼ同じ内容で実習を行い、担当した患者さんによってそれぞれに異なる治療のケースを学修します。さらには、各専門診療科における分散実習（高度・特殊な治療の見学および部分的な実践）や紹介状を持たずに本院歯科を初診される方への医療面接（予診）、他の学生の診療介助などを行っており、歯科治療の全容を理解します。ここに令和２年度から導入された全国共用試験（Post-CCPX）や歯学部卒業・国家試験合格後に行う歯科医師臨床研修の準備（６年次６月以降）などが加わるため、その忙しさは容易にご想像願えることと思います。学生にとっては苦労することが多いかもしれませんが、狭小な口腔内で精密作業を行う歯科治療を現場で学ぶことには重要な意味があり、次のステップとなる歯科医師臨床研修に進む際に大きな自信になることは間違いありません。現在、文科省、厚労省は歯科医師の育成につなぎ目をなくすことを目指して施策を進めており、新潟大学歯学部・医歯学総合病院歯科ではそれに準じて歯学科臨床実習、歯科医師臨床研修の体制整備を図っています。

医歯学総合病院歯科における感染拡大対策措置

令和２年４月、国内および県内での感染者数の動向に鑑み、医歯学総合病院歯科では緊急を要する処置を除き診療を制限することを決め、４月下旬から５月末までの間、本院を紹介された新患の方、急患の方以外の通常の予約診療は一時停止いたしました。その後、６月から曜日毎に診療できる歯科用チェアー（ユニット）を定め、診療する

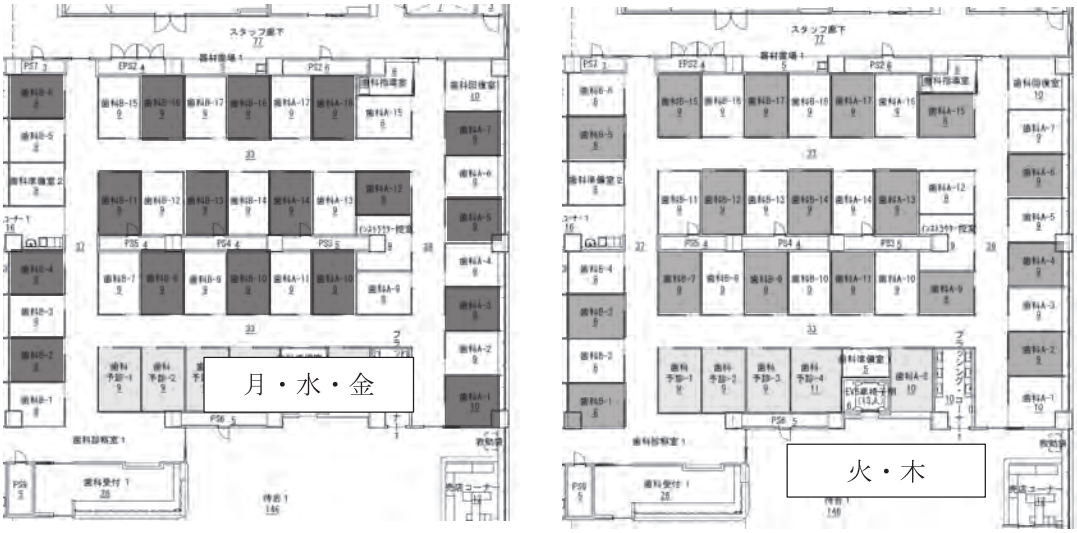

図１　令和２年６月の診療ユニット（臨床実習・臨床研修・歯科総合診療科診療スペース）
月水金は■、火木は■が使用可、□は新患に対する医療面接スペース

ユニットの間を空ける対策を行って診療を再開しました（図１）。６月に大きな感染拡大がみられなかったため、７月より診療ユニットの制限を解除して診療を再開し、現在に至っています。この間、歯学科臨床実習も医歯学総合病院歯科同様の対応を行い、外来での実習を行うことができない学生はレポート作成、様々な技工物の製作などに時間を充てていました。

医歯学総合病院では感染対策作業部会での検討を基に独自に往来を禁止する指定地域を定め、飛沫を伴う治療を行う歯科では受診前の２週間以内に指定地域への移動があった方の治療は控える（予約を取り直す）こととしました。また、学生を含む診療スタッフや院内での交叉感染を防止するために、来院された患者さんに対するスクリーニング（問診や検温）を徹底し、病院HPや玄関に注意文書を掲示して理解を求めました。さらに、歯科治療を行うスタッフには、通常のマスクや手袋に加えて必ず目の保護具（アイガード）、帽子、エプロン（PPE=Personal Protective Equipment：個人防護具）を装着するというルールを設けました。医歯学総合病院に勤務する医療スタッフ全員には、日常生活においても感染対策を徹底した上で毎日の検温や三密を避ける行動が求められており、現在も継続していますが、これらすべては臨床実習を行う学生も例外ではありません。

令和２年度歯学科臨床実習

結果的に令和２年度の臨床実習（歯学科51期生）において学生が診療に参加することができた日数は例年の約73%となったため、修了判定は文科省、新潟大学の方針に従って歯学部教授会で検討した令和２年度用の内容で行われ、全員の修了が認められました。歯科外来での診療が制限されていた期間、各診療科ではレポート課題を作成する、模型実習を行う等の代替を用意しましたが、指導教員にとっても想定外のことであったため十分な準備ができていたわけではありませんでした。しかし、学生もそれぞれに工夫して臨床実習の再開後、さらにはその先に備えるために時間を使ってくれていたように思います。診療を制限したことにより、医歯学総合病院歯科に通院なさっている多くの患者さん同様、臨床実習にご協力くださっている患者さんにもご迷惑をおかけしましたが、診療制限開始・緩和のいずれに際しても患者さんから苦情等の訴えはなく、すべての方が臨床実習へのご協力を継続してくださいました。当時、新型コロナウィルス感染症に関しては不明な部分が多く、若年者は感染しても発症しづらいということが報道されたこともありました。そのため、一部の患者さんより学生さんの近くに行くのは避けたいとの訴えがあったことは無理もないことと思います。しかし、現在ではほぼ以前と同様に臨床実習が進んでいます。これは、すべての学

生が担当医の一人として診療に加わることの責任や医療人としての自覚、プロフェッショナリズムを持って患者さんに接していたことの表れと考えています。

診療参加型臨床実習を継続するために

令和３年１月、国内において最も深刻な状況下の一つに数えられる大阪府の吉村洋文知事が「コロナウイルスは口の中、唾液に多く含まれている。なのでマスクが有効だし、飲食の場も指摘される。一方で利用者側がマスクができない環境に歯科医院がある。大阪には5500もの歯科医院があるが、クラスター発生はゼロ。感染対策の賜物と思うが、何かある。何か？専門家には、是非分析してもらいたい。」とツイッターに呟いていたそうです。先にも書きましたが、歯科治療は切削片や唾液の飛沫を伴うことが多く、患者さんの歯肉から出血することも珍しくないため、歯科医師や歯科衛生士は常に感染のリスクと背中合わせで仕事をしていると考えることができます。歯科に限らず、医療従事者には標準予防策（SP：Standard Precaution）の徹底が求められます。自分の安全はもちろん、医療従事者が感染症を媒介するようなことはあってはならないためですが、すでに一般化している衛生的手洗い、アルコールによる手指消毒をはじめ、唾液や血液など患者さんの体液との直接的な接触を避けることは臨床実習中の学生も常識的に理解しています。吉村府知事のつぶやきは、臨床実習を通じてディプロマポリシーに提示した歯科医療における感染対策、安全確保を実践してきた本学学生にとっては当然と受け止められたことでしょうが、発言力のある方のこのようなご意見に改めて何かを感じているはずと思います。

これまでに誰も経験したことのないこのような状況下では、臨床実習を行うことに不安を感じる学生がいてもおかしくはありません。しかし、歯科医療の安全は術者が気をつけることによって保たれることを実際に確認する機会になっているとも考えられます（今回、他大学の臨床実習の現場を担当する先生と何度か情報交換を行いましたが、皆一様にこのことを指摘していました）。歯科医師に求められる技術には現場で苦労しなければ身につかない多くのことがあると思います。現代版ヒポクラテスの誓いと例えられる「新ミレニアムにおける医のプロフェッショリズム」（すでに少し古くなってしまいましたがこれが最新のもののようです）では、プロフェッショナルとしての一連の責務として10の項目があげられていますが、正直であること、他人の情報を守秘すること、互いに敬意を払い周囲と良好な関係を築くこと、科学的根拠に興味を持つこと、など医師あるいは歯科医師の免許を取得する前に実践することができるものが多いように思います。プロフェッショナリズムを理解していなければプロフェッショナルな行動をとることはできない、という文章を目にしたこともあります。文部科学省や厚生労働省が各歯科大学・歯学部に診療参加型の充実を求め続けている理由の一つはここにあると考えられます。

今回、歯学科臨床実習の責任者として私も様々なことを考え、初めての経験をしましたが、本学歯学科の診療参加型臨床実習は歯学部や病院の多くの方々に守られ、たくさんの患者さんのご協力に支えられていることを改めて痛感しました。同時に、このような実習には真摯に歯科医学・歯科医療を学ぶ姿勢を備えた学生と親身に指導に当たる教員がいてこそ、真価を発揮することを再確認しました。まだまだ予断を許さない状況が続いていますが、一日も早い収束を願うと共に本学歯学科臨床実習のますますの充実・発展に尽力したいと思っています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

たくさんの笑顔に出会えた１時間

口腔生命福祉学科１年生担任　中　村　　健

５月28日に開催した「口腔生命福祉学科１年生交流会（以下、「交流会」という）」について報告します。

新しく始まる学生生活…、たくさんの出会い…、新しい環境での暮らし…、小さな不安と大きな期待を胸に、入学した新１年生たち。本来なら、広いキャンパスを駆け回り、学食のメニューに目移りし、部活動やサークルの勧誘を受け、履修選択に悩み、アルバイトを探し、そして学び、たくさんの仲間たちと親睦を深めながら、学生生活を謳歌する、そんな当たり前が、コロナ禍で当たり前ではなくなってしまいました。

環境の大きな変化に加え、遠隔授業、外出自粛、移動制限、活動制限、人とのつながりにくさなど、コロナ禍での生活は多くのストレスを生みだし、孤立や孤独につながる怖さもあります。このような学生生活を余儀なくされた学生に、情報交換とつながり構築を目的とし、さらにメンタルケアの観点から、交流の場が必要と考え企画しました。

自由参加とし、18名の学生から参加いただきました。

なお、開催にあたり手指消毒、マスク着用、咳エチケット、室内換気など新型コロナウイルス感染症対策を徹底しました。

葭原明弘学科長の挨拶で開会し、学科の専任教員が一人ずつ自己紹介を行いました。

学生同士の交流の時間では、４人から５人の小グループに分かれました。初対面同士の学生も多いため、２分間自己紹介およびアイスブレイクで緊張を解きほぐしながら楽しい雰囲気でおしゃべりを楽しんでもらいました。続いて、グループメンバー１人１人を紹介するフリップボード作りに挑戦しました。自己紹介で得た情報だけでなく、メンバーの趣味・特技・好きなモノ・部活・サークルなどをインテーク面接さながらに聞き取りし、画用紙へ書き込んでいきました。出身地の話に驚き、好きなタレントや趣味の話に目を輝かせて盛り上がる、そんな光景が各グループで見られました。真剣に、楽しみながら作成に取り組み、イラストも加えるなどして色とりどりのフリップボードが完成しました。

フリップボードを手にして、教室から歯学部中庭へ移動し、最後は参加者全員で記念撮影を行い、閉会となりました。

マスクを外して集合写真撮影

交流会後、参加者にアンケート調査を実施しました。

「交流会で情報交換ができた」は89%が「そう思う・ややそう思う」と回答しました。「つながりを作ることができた」は83%が「そう思う・ややそう思う」と回答しました。「学生生活に不安がある」は交流会参加前は50%が「ややそう思う」と回答しましたが、交流会参加後は22%へ減少しました（前後とも「そう思う」と回答した者はいない）。「次回交流会がある場合はまた参加したい」は全員が「はい」と回答しました。

自由記述では「話したことがない人と話すことができて良かった」という感想が最も多く、「楽しかった」「あっという間だった」「参加して良かった」と肯定的な感想を多くいただきました。「もう少し早くやってほしかった」「他のグループの人とも話をしてみたい」という貴重な意見もあり、次回や来年度の改善点をいただくことができました。

アンケート結果から、交流会開催の目的はおおむね達成できたと考えています。

新型コロナウイルス感染症の終息が見通せない状況ですが、引き続き交流会開催など、学生同士および学生と教員の関係をつなぐ取り組みを続けていきたいと思います。

アイスブレイクの様子

フリップボード作成中